

沾徳年譜追考：京極高住の俳諧について

白石, 悌三
九州大学大学院

<https://doi.org/10.15017/12325>

出版情報：語文研究. 11, pp.19-24, 1960-09-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

京極高住の俳諧について

白石悌三

さゝやかな報告である。

先に沾徳年譜（連歌俳諧研究第十九号）を作製した折、『面々硯』

（調和撰）
（元禄十一年刊）に

慈父それのとし正月七日容貌去

つてあしたの霞遠く隔し

七種の内か葱もおもひ草 駒角

以下、湖春、調和、立志、山夕、正友、沾徳、秀和、不角、無倫、

一蜂、後露言、松口、好柳、素堂、一鉄、露沾、幽山、執筆、京似

船、同信徳、同如泉、同言水、同常牧、同我薫、同幸佐、同幽山、

田助叟、大坂来山、同才膺、同万海、同一礼、同困水、大津尚白、同任口、

田可心による一句一順の歌仙が目を引いた。もと調和門の露言の引

きたてによつて、『坂東太郎』『富士石』『金剛砂』『題林一句』

『白根嶽』と調和系の俳書で売り出してもらいながら、風虎の死

を機縁として沾徳と改号した後は、露沾の動きに従つて急速に蕉門

と近附いたため調和とは対立してしまつた沾徳、その沾徳が調和撰

の俳書で同じ歌仙に名を連ねているのは珍しかったし、それを敢え

てせしめた駒角とはどういう人であろうかと好奇心が湧いた。否、

調和・沾徳ばかりではない、ここには慈父追悼の名のもとに江戸・

京・大坂に亘つて当代一流の宗匠が超党派で豪華に顔を揃えている。

元禄十年没の湖春が脇を附けているからそれ以前の興行とは思つた

が、いつこの豪華な歌仙が巻かれたかについては、絶えず参照させ

ていただいた荻野清先生の信徳・言水の年譜にも『面々硯』の刊年

の項に附録してあるだけでわからないので、そのままにしておい

た。

『面々硯』にはこの歌仙に

右

正二位前権大納言藤原基賢入道のおそはされし序文あり俳師がめ

いほく不可勝計歟雖然私の憚ありて干茲畧之

という後書きが附いているので、せめてこの省畧された序文でも

あればと思つていたところ、たま／＼昨年福岡県三井郡草野の屏山

文庫で、この歌仙の完全なる写本一卷を見つける事ができた。少々長いが次にその序跋を紹介してみよう。

大和言の葉の道広く異竹のよゝにつたへたる姿様／＼なるか中に俳諧舛又その一ふしなるにや源の俊賴は哥も闇路をたすけさらめやと詠し空也は極楽ははるけき程と問しかと杯詠め待るも実此品にこそ爰に京極氏五位下源朝臣高住といへる武將先考は丹州田辺とかやいふ所の主にして飛彈守何某となんい侍りけらし彼若草の三ツ葉四ツ葉の春子の日の比とかや世をはやくし仏名法性院道保と称しけるこそそのしるし端泰教寺といへるに星霜ふり行まゝにいつしか飛鳥川の流に三十三とせの月日をうかめ歳の矢のはやく過るなる梓弓のかへらぬむかしを忍びいまはた遺忌の追福品／＼の手向草摘はやせるか中にわけて七種に葱おもひ草の云の葉を始て此道に妙なるをえらひすゝめて石上ふるき世の哥仙になぞらへて三十六人の俳言を連続す句々金玉の光り言々詞花のにはひ七重宝樹の陰にいたらしめ八功德池の波によする志豈雲仏觀喜の法味にあらずや誠に至孝のなせる所感嘆極なし猶更に言葉の林色とこしなへにして青柳の糸たえす正木の蔭なかくつたえん家門の榮昌慈眼の光りを加えしやん物にこそあらめとしかいふ

正二位前権大納言

藤原基賢入道書

○ 右集る処柳の都花の浴それ／＼の名をこきませ難波の芦の若葉にてひとふしあるをもとめそへて慈父尊靈に手向草となしぬ仍て七種の日をしのぶの野に則駭す

京極甲斐守殿

跋書

序文の筆者藤原基賢入道は公卿補任によると、寛永三年九月二十三日關基音（承応四年二月十七日没）の二男に生れたが、東園基教（寛永十三年十月十四日没）の男となり、権大納言正二位にまでなつた人。貞享三年十（一説に八）月十九日、六十一才で出家して法名を常算といつていた。その序及び跋によつて駒角とは京極高住（享保十五年八月十三日没）の俳号である事が判明した。高住は寛政重修諸家譜によると、万治三年丹後の田辺侯京極飛彈守高直（寛文三年一月七日没）の四男に生れて土肥之助といつた。寛文七年八月二十九日長兄伊勢守高盛（宝永六年二月一日没）の男となり、翌八年五月二十一日高盛が田辺を改めて但馬の豊岡に移された後、延宝二年三月十八日その封を襲い、十二月二十七日從五位下甲斐守に敘任された。従つてこの歌仙は父高直の三十三年忌追悼という事であるから、寛文三年より數えて元禄八年の正月七日に催された事になる。

ところで京極高住については、福井久藏博士の『諸大名の學術と文芸の研究』に「宗因に学び俳名を云奴といふ。享保十五年卒す。年七十一。」とあり、奈良鹿郎氏も「玉藻」昭和三十四年四月号に「豊岡侯云奴の俳句」を岡山の「誹枕」（延宝八年刊）、言水の「江戸新道」（延宝六年刊）、「江戸蛇之鮓」（延宝七年刊）、「江戸弁慶」（延宝八年刊）から拾つてやゝ詳しい紹介をされているが、「駒角」号については触れておられない。京極杞陽氏にもお尋ねしたけれど御存知ない由であつた。しかし『豊西俳諧古哲伝草稿』の

西国の部にも

元禄五年正月廿四日

京極甲斐守侯へ召されて百韻一座仕る

京極甲斐守高住但馬豊岡侯御俳名駒角

幽固せ巖をもとのさゝれ屑

華に見出す世の福寿草

方飾る隣の村も東風吹きて

酒にとられし春雨の糞

青柳に船曳奴も力なき

岸辺の移り浪のかけよる

月の外涼しき物は何々ぞ

我手拍子をこたま答ふる

下畧

とみえて、高住が駒角と号した事に間違いはなきさうである。

そこで手近の俳書から云奴・駒角の両号を拾ってみると、奈良氏のあげられた幽山・言水撰の前掲四書の外に

『江戸広小路一上（延宝六年・不卜撰）に云奴の発句一

『富士石』（延宝七年・調和撰）に云奴子の発句二

『坂東太郎』（延宝七年・才丸撰）に云奴子の発句三

『名取河一夏秋（延宝八年・維舟撰）に云奴の発句四

『京日記』（貞享四年・言水撰）の言水・湖春・仙庵

一座の四十四に駒角の発句

『前後園一（元禄二年・言水撰）に駒角の発句一

『破曉集』（元禄三年・順水撰）に言駒角の発句一

駒角公

□ 風

可 雲

幽 山

別 水

西 国

調 和

執 筆

『都曲』（元禄三年・言水撰）に駒角の発句四

『秋津嶋』（元禄三年・団水撰）に駒角の発句一

『浦島集』（元禄五年・楊々子撰）に駒角の発句一

『蘆分船』（元禄七年・不角撰）に駒角の発句一

その他、写本では前掲の『豊西俳諧古哲伝草稿』に更に

同（註、元禄五年）三月十二日

大和侯の御茶屋にて御客駒角公俳師幽山召連れらる

一霞千品にはむる夕鴉

言葉秀て若競ふ庭

曲り水玉盃のすみやかに

月のこはれる片われの中

露払ふほともやさしき村伝へ

下畧

とあり、『露沾俳諧集』に

云奴子会 三月朔日

山やおもふかゝるゝ霞は頭痛の種

さくらか配るよもの木まくら

勝手から月の春風持て出て

わかもあふなるたわ布の雲

そも鷹の尾上やもとのすみ所

雪の見殿のまゝならぬ空

とも角もすねさせ置松獨

正直ものゝ杉にしらるゝ

以下、一鉄・言求・木子と続く百韻があるが、これは一座の連衆

駒角公

大森助市

幽 山

西 国

執 筆

露 沾

云 奴

曲 言

吟 市

幽 山

似 春

如 流

三

や句風から見ても延宝年間のものとは推察される。すると高住は天和・貞享の間に、云奴から駒角へと改号した事になる。高住二十五才の貞享元年九月二十一日には領地の御朱印を下されているから、おそらくこの頃を契機に、若年時の奇矯な俳号を改めたものであろう。

ところでこの新資料の卷子本、句については一條の附句「都をは出羽の末摘花買に」の「買」が「売」になつてゐる以外「面々硯」のものとは殆んど異同はないが、作者の方がいさゝか違つてゐる。発句の京徳氏駒角公以下、江戸正立・調和・立志・山夕・同正友・沾徳・秀俊・不角・無倫・一峰・露言・好柳・松口・素堂・一鑑・露沾・幽山・執筆・似船・信徳・如泉・言水・常牧・我黒・幸佐・晩山・助叟・来山・才磨・万海・一礼・困水・尚白・驚堂佐渡守殿

任口・可心で、右のうち好柳と松口が「面々硯」と逆になつてゐる。これはおそらく書写の間違いで公刊のものが正しいのである。尚白が「大坂」になつてゐるのも同様「面々硯」の「大津」が正しい。揚句の可心は『俳枕』には可心とあり、云奴・幽山との三吟歌仙もみえていて古くから親しいつきあひのようであるが、下つて『前後園』『浦島集』には可心、『都曲』には可心とみえるから改姓したものと思われる。いずれにしても刊本に「田辺」、写本に「豊岡」となつてゐるのは京極家が田辺から豊岡に移つた事情によるものであつて、高住と可心とが主従とみなされるほどに近かつた事を裏附けてゐる。これは前二者の如く単純な書写の誤りではない。そしてこのような性質の異同があるだけに、脇句の湖春が弟の正立になつてゐるのはどうしたものか解釈に

苦しむのである。書写の場合、脇句早々から誤るとは考えられないし、それも単純な写し違いではない。並の宗匠ではない人だけに、何か俳壇的な事情を勘ぐつてみたくなるのである。

異同があるのは以上であるが、一巻を眺めてみると、初折は江戸の宗匠、名残の折は上方の宗匠という構成で、脇句に季吟の男花の定座に初折は露沾、名残の折は任口を各々立てた他、第三は調和、折端は初折を幽山、名残の折を可心が各々受け持つてゐる。前掲の俳歴とも考え合わせて駒角の俳交をおよそ知る事ができる。

幽山撰『誹枕』の追加を除く部分の成立がその序にいう如く「寛文のころ」（俳諧大辞典には寛文九年かとする）とすると、そこに入集してゐる高住（云奴）にしても沾徳（沾藁）にしても当時十才前後であり、俳歴としては一番早いものになる。その『誹枕』に始まる可心との間は前述のように非常に親しいが、幽山を加えた三者の関係はどちらが先行するものかよくわからない。しかし大名の威光とはいへ、このように豪華な追悼歌仙が実現したのは、全くこの二人のおかげである事は、二人が各々折端をつとめてゐる事によつてもわかる。とにかく一番深い交りであつたらう。調和や露沾は幽山を通しての交りである事が前掲の連句からもうかゞわかる。元禄の時点において相反するこの二つの立場、調和・不角・一條等と露沾・素堂・湖春等を同座せしめたのは幽山の功績である。任口をかついたのもすぐ後に幽山が彼に仕えて改名した事から推すと幽山の関係であらう。その他では言水との関係が注目される。『誹枕』を延宝八年にすると、俳書の上では言水との関係が先になるが、延宝年間には江戸俳壇が談林的統一をみせていた時であり、帰京後の言

水との事はともかく、この期間の入集状態から師系を云々する事はむづかしい。言水もやはり幽山との関係からではあるまいか。只元禄になって専ら言水系の撰集にその名がみえるのは、蕉門との相関関係における江戸俳壇での幽山の地位の変化に伴うもので、それに高住が国元におもむく事も多く、帰京後の言水と関係を深うしたのではあるまいか。特に「都曲」では巻頭に歳旦の四句を掲げている程である。又「駒角」号から不角との関係も疑ってみたが、『蘆分船』以外の俳書には見当らず、『蘆分船』は他門の俳人をも多く載せているので証拠にならない。京極家の旧領地丹後やその隣の可心の郷里である若狹が言水・不角の圈内に入つて榮えるのは元禄の頃であり、高住の俳諧が国元から始つたとは考えられない。高住は延宝四年四月十九日はじめて但馬の新領地に行くの暇を給つているのでそれ以前は江戸住いである。

こうみてくると、奈良氏も指適しておられる通り、高住の俳諧手ほどきは福井博士のいう宗因でなくて、その俳風を継承した幽山からであつたらう。「講枕」には「幽山、京上り餞別に給ふ」という前書の云々の発句があり、前掲した「駒角公俳師幽山召連れらる」という前書きの歌仙もあり、当時の江戸俳壇を特徴づけるおかゝる宗匠的なひとつの典型がこゝにもみられる。諸大名の江戸藩邸を中心とする俳人の動きは、単に俳壇史上の現象にとゞまらず本質的な俳風にも作用して、江戸俳諧史の特殊性を考える上の大きな要因となるのではあるまいか。おぼろげながらこの交流は露沾がかなめになつていたようで、高住の場合は前掲の云奴会がそれを示してい

る。

それから調和との関係でもうひとつ看過できない事がある。それは超党派的に東西殆んど一流宗匠を揃えながら、こゝに蕉門だけが全くオミットされている事である。もつともこの江戸の企画に対してわずかに大津の尚白が一人加えられているが、只一人のこの蕉門は故あつて爾来芭蕉と感情的に疎隔の人であつた。もとゞ蕉門とつきあひのない高住にしてもこれは不自然であらう。だがこの追悼歌仙が元禄八年正月七日に催された事が判明してみると一応の納得はできる。折から其角・嵐雪・桃隣は前年の十月十二日に亡くなつた師芭蕉の弔いに上京し江戸を留守にしていたのである。その留守にこのような大規模な企画があつたのは偶然であらうか。おそらく偶然ではあらう。それにしても其角・嵐雪のあとを守る東潮・介我・神叔・百里・琴風・仙化・萃白等のなんとる無力。又、東西両奉行といわれる杉風・去来以下の蕉門が、職業俳人化する事をいましめる師説に忠実なばかりに、芭蕉を失つた暁、俳壇的に何と孤立した存在であつたか、今更のように思い知らされる、蕉門親派から貞門談林の残党、前句附派迄含めてかくも完全に蕉門を占め出した結果は偽らざる当時の実情だつたのだから。しかしこの歌仙が、三年の後に成立の事情を示す前書を省いて十数年ぶりに出版した調和の俳書に発表された事には、いさゝかの疑点をさしはさまないわけにはいかない。従来蕉門勢力に圧迫されて来たかつての長老調和が、「ひとつ星」以来十三年目に前句附界で獲得した門人を擁して調和門の状勢を示す「夕紅」を出し、続けて翌年、今度は旧来の交らぬ交友を誇つて芭蕉亡き後の俳壇に返り咲こうとしたのがこゝに

いう「面々硯」である。「面々硯」は巻頭に嵐雪・桃隣・拳白・東潮・神叔・介我等を含む多くはその年の歳旦句をあげ、次に「おもしろの餅や黒き花の雲」といふ駒角歳旦吟を載せ、そのあとこの追悼歌仙をいきなり続けているので、一見その年の正月七日の興行のような印象を与える。尚最後には嵐雪・桃隣・神叔・介我を含めた百韻をも収めている。其角を中心とする蕉門勢力を嵐雪・桃隣の側からなくすしにしていくかたわら、蕉門外の三都俳壇を総集したこの追悼歌仙を乞い受け、その成立した偶然の時点をはずして、しかも成立の事情を示す前書を「私の憚りて」省き発表したのは、その偶然性を反蕉門的性格にすりかえんとする調和のかくされた意図であったと見るのは行き過ぎであろうか。露沾はこの歌仙が巻かれた元禄八年の春に奥州岩城へ隠退してしまつたし、湖春は元禄十年に他界した。発表するに当ってけむたい存在はもはやなかつた。沾徳の如きはかつて自派の末流であり問題にもしなかつたろう。しかしこれが誤算であつた。

露沾の隠退後その暫間の立場から独立した沾徳は、其角の提携者として大成し、しかもこの頃から沾州・仙鶴という有力な門人ができて、彼等が積極的に其角派と交流しつゝ、沾徳の周囲に新しい団を形成していった。この団の中で宝永二年、沾徳は其角・嵐雪の生存中にその門下をも擁し、山夕や調和門の艶士・和推をも合せて洒落風を世にとり「余花千句」を出版した。「江戸筏」序における沾州の自負によると、本書は其角の「末若葉」（元禄十年刊）を継ぐ江戸俳壇の主流であり、「已來他国の俳も粗これに移」つたといふ。こゝで蕉門傍系である沾徳の主流への乗り換えが行われたとみてよ

いであろう。従つて宝永四年其角の死を見ました調和が、もはや敵なしと『つげのまくら』で正面から攻撃をかけた時、この一団はゆるぎもしなかつた。この『つげのまくら』の決戦は有名であるが、その前に豊岡侯京極高住を利用して軽い前哨戦があつた事は案外注意されていないのではあるまいか。

〔附記〕京極杞陽氏及び中西啓・石川八朗両兄から御教示をいたゞきました事を深く感謝申し上げます。

〔註〕三都の宗匠連の中に例外として加えられている大津の尚白は、追善集『夕がほの歌』にのせる門弟宰陀の「老贅子行状」によると、「晩年京極家の扶助をえながら、丹後にもくだらず」とあつて、特別の関係があつた事が察せられる。